

農業は自然界に学ぶ場

卒業後就農し、専業農家になった。農作業からは様々なことを学ぶことができた。

私は人参も栽培している。人参は、季節によっては発芽率がとても悪く、10cmの間隔の中に100粒以上の種を蒔く。その中の30粒くらいが発芽して、さらに間引く。間引くときは、葉の繁った大きいものは引き抜き、「中の上」くらいを残す。人参は根が食用になる。葉の勢いが特に優れた個体は、本来、根に行くべき養分が葉に集中している可能性があるからだ。だから、間引き作業では「中の上」を残し、トップレベルのものは引いて捨てる。

余談だが、採用試験でトップレベルを採用しないという発想もいいかもしれない。学業成績が特に優秀な者は、勉学に集中したがために「大切な視点」を欠いている「可能性」があるかもしれない。数学や英語の成績が悪い者は、職場業務に対応できない「可能性」があるから不採用になっているのだと思う。

間引きは、例えば10cmの間隔に1本残すことになる。最適な「中の上」が2本、2cm間隔で生えていたら、前後との間隔の兼ね合いで、片一方は引いて捨てられる。周囲との位置関係から生じたどうしようもない「運命」によるものだ。「私はあの人と同じなのに、なぜ残れないの？」このような主張は通用しない。固体の優秀さより、人智を超えた大きな「運」がある。

こんなことを子供たちに教えることは難しい。言葉で教えることは難しい。だが、農作業や自然と触れ合う中では様々なことを学ぶことができる。理屈ではなく、五感で学ぶことができる。

春から夏にかけて私の畑では、梅干しに使う赤シソを栽培している。赤シソは発芽が揃わず、早いのが10cmくらいになったころにやっと芽を出すものがある。間引きを終え、順調に生育しているときに後から芽が出ると、「邪魔、目障り」になる。「出遅れ」「落ちこぼれ」だ。

赤シソは、発芽してから幼苗期の頃が弱くて、ちょっとしたことで枯れることもある。2、3年前のことだが、順調に発芽して1cmくらいに生育したとき、強い春風によってほとんどが枯れた。その年は、後から発芽してきた「出遅れ

組」「落ちこぼれ組」が収穫を支えた。

生命は、「種」を伝えるために様々な仕組みを備えている。何万年に一度のリスクに耐えるシステムがなければ、生命は今日まで伝わらず、これからも伝わらない。何万世代におよぶリレーによって築かれた人類の歴史の中では、「落ちこぼれが人類を救う。」そんな場面もあっただろう。「弱者を庇う」という発想ではなく、「弱者の存在意義」に気付かせられた場面だった。自然界こそが偉大な教師だ。

利発な子やとろいやツ、がんばり屋さんやのんびり屋さん、このバラエティが人類を今日まで伝えてきたと思うと、生命の面白さや頼もしさ、偉大さを感じる。大切なのはバランスだと思えば、世の中の空気が変わる気がする。

こんなことを学ばせてくれる自然との交わりこそが、人類にとっての農業・林業・漁業などの存在価値だと思う。

霞ヶ関や大学などの机の上では、出来上がった知識の組み合わせによって何かを作り出すことには長けている。しかし、新たなオリジナルな知恵は、自然界との接触の中でしか生まれえない。そういう意味で、人が自然界から「学ぶ場」を大切にしなければならない。古代文明が滅んだのは、農業が衰えて食料を供給できなくなったから文明が滅んだのではなく、人が自然界に学ぶ道を絶ったから文明が滅んだと思っている。人が自然界に対する謙虚さを持ち続けるためにこそ農業は存在していると思う。

だからといって、そういう意味だけで農業を残すべきだと主張するつもりはない。市場経済の中では、産業としての競争力を発揮するべきだ。それが市場経済の中における農業という産業のあり方だ。

しかし、国家の中における農業の本来のあり方とは何だろうか。

もし、家庭の中から台所がなくなったとする。台所のない家庭を「家庭」と言えるだろうか。「家風」は台所で創られる。食べることで体は育つ。しかし、作る場面でこそ人は磨かれる。

農業がなくなった国を「国家」と言えるだろうか。農業が健全に機能している国、日本国はそんな国であってほしい。

農業の存在意義は、食料供給ではなく、人が「自然界に学ぶ場」だと思う。

(遠賀郡農業協同組合代表理事組合長 安高澄夫・あたかすみお)